社会不安とスピーチ場面の自伝的記憶との関連

○泉水紀彦¹・望月 聡²

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²筑波大学心理学系)

キーワード: 社会不安・自伝的記憶・視点

Autobiographical memory in social anxiety

Toshihiko SENSUI¹ and Satoshi MOCHIZUKI²

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, ²Institute of Psychology, University of Tsukuba)

Key words: Social anxiety, Autobiographical memory, Memory perspective

目 的

社会不安の認知モデルでは、社会的状況のパフォーマンス評価は過去の社会的状況の記憶に影響されている(Rapee & Heimberg, 1997)や、社会的な失敗経験が記憶内に蓄積されてネガティブな信念や恐怖を増強する(Clark & Wells, 1995)と提唱されており、社会不安維持における自伝的記憶の特徴を明かにすることは重要である。

社会不安の自伝的記憶を検討している研究は少ないが、社会不安者は自己関連情報を伴う社会的状況の記憶を想起すること、第3者視点から社会的状況をイメージするバイアスがあることが指摘されている(Morgan, 2010)。泉水・望月(2009)では、過去の不快に感じた社会的状況の記憶を想起してもらうと、視点の特徴はみられず、社会不安者は可視的・可聴的な身体感覚を多く報告する傾向がみられた。

そこで本研究では、社会不安者における自伝的記憶の特徴を明らかにするために、高社会不安者と低社会不安者に同じスピーチ課題を課し、2日後のスピーチ課題体験の記憶を検討する。

方 法

対象者 大学生 12 名(男性 6 名, 女性 6 名, 平均年齢 20.42±1.44)。BDI 得点の高い男性 1 名と, SPS 得点の中央値上の女性 1 名を分析から除外した。SPS 高群(5 名)と SPS 低群(5 名)に分割し, SPS 低群($M=12.4$), SPS 高群($M=28.2$)となり,有意な差がみられた($p<.01$)。

測定変数 (1)Social Phobia Scale 日本語版(SPS; 金井他, 2004), (2)ベック抑うつ尺度 (BDI; 林・瀧本, 1991), (3)Situational Self-Awareness Scale(SSAS; Govern & Marsh, 2001) 私的自己/公的自己/外的環境の意識, (4)Body Sensations Questionnaire(BSQ; Chambless et al., 1984) 身体感覚の評価, (5)印象項目(Mansell & Clark, 1999) 他者からみた否定的印象/肯定的印象/不安関連印象の自己評価, (6)Autobiographical Memory Questionnaire(AMQ; Rubin et al., 2003) 出来事想起時の記憶特徴・想起体験を測定, (7)Post-Event Processing Questionnaire(PEPQ; Rachman et al., 2000)

実験手続き 【1 日目】参加者入室後, 実験の説明・同意を行った。同意後, SPS, BDI, SSAS, 気分への回答を求めた。別室へ移動し, 指尖脈波と皮膚コンダクタンス水準を測定するセンサー器具を右手につけたまま, 3 分間のベースライン測定を行った。スピーチ教示後, 3 分間のスピーチ準備期間を取った後, 白衣を着た異性の評価者に向かって 3 分間スピーチをお願いした。五十嵐・嶋田(2008)を参考にし, スピーチ中に評価者は 40 秒間隔で特定の行動(頭をかく/脚を組む/咳払い/首をかしげる)を行った。スピーチ後にセンサーを外し, 元の部屋に移動した上で, 気分, SSAS, パフォーマンスの出来, 印象の自己評価, BSQ への回答を求めた。

【2 日目】参加者入室後, 再びスピーチを行うように教示し

(予期不安教示), 質問紙への回答を求めた。STAI の状態不安尺度に回答してもらった後, 1 日目のスピーチでの記憶を鮮明に想起してもらった。閉眼 3 分間ののち, 思い出したものから, 自由記述欄へ記入し, 記憶想起の視点と鮮明度を回答してもらった。1 回目のスピーチを思い出しながら, その時の印象の自己評価(2 回目)と BSQ(2 回目), 記憶問題に回答をもとめ, 最後に PEPQ と AMQ への回答をお願いした。

結 果

(1)自伝的記憶の自由記述

自由記述分析のために, ネガティブな情動価をもつ記述を(a)ネガティブな自己関連情報(ex.何度も言葉につまってしまった, 頭がいっぱいになった), (b)ネガティブなパートナー関連の記述(ex.相手から反応がないように感じた, 相手にうなずいたり反応してほしいと思った)にカテゴリー分けを行った。ネガティブな記述全体の中で, 自己関連記述の比率(%)とパートナー関連記述の比率をそれぞれ算出した。各カテゴリーの割合が SPS 群により, 記述の割合に差がみられるか検討したところ, 自己関連記述は, SPS 高群(93.4%)のほうが低群(58.8%)よりもネガティブな記述の中で占める割合が多かった($t(8)=3.07, p<.05$)。一方, パートナー関連記述は, SPS 高群(6.8%)のほうが低群(41.4%)よりも, ネガティブな記述の中で占める割合が少なかった($t(8)=3.01, p<.05$)。

(2)出来事想起時の特徴(視点・AMQ)・PEP

社会不安者が出来事を第3者視点から想起しているかを検討するために, SPS 高低群で視点得点を比較したところ, 有意差は見られなかった。両群とも第1者視点から出来事を想起する傾向がみられた。また AMQ の各項目を, SPS 高低群で比較した結果, 記憶の特徴(視覚イメージ, 空間イメージ, 聴覚イメージ)には差異がみられなかったが, 「出来事を言葉にして説明できる」項目で, SPS 低群($M=2.0$)と比較して SPS 高群($M=4.2$)が高値であった($t(8)=3.78, p<.01$)。次に PEP 得点を SPS 高低群で比較したところ, SPS 高群($M=329$)は低群($M=129$)よりも PEP を行っていた($t(8)=4.85, p<.01$)。

(3)BSQ, 印象評価の変化

社会不安の程度と, スピーチ後/記憶想起時の BSQ 得点・印象評価を比較するために, 2(SPS 低群/SPS 高群)×2 の測定期(スピーチ後/記憶想起時)の分散分析を行った。その結果, BSQ, 否定的印象, 肯定的印象, 不安関連印象において, 群と測定期の主効果・交互作用はみられなかった。

考 察

先行研究と同様に, 社会不安者は自己に関するネガティブな情報を多く想起する傾向が示唆された。しかしながら, 視点, 身体感覚に群間差は認められなかった。また SPS 高群が SPS 低群と比較して, 出来事を言葉にして説明できると感じていることが示された。PEP 得点にも有意差があることから, 社会不安者は事後に何度も出来事を思い返したために言語的に明確になった可能性が考えられる。